

1. ご挨拶

会員みなさまへ

事務局長 有本（小山）真紀

事務局長の役目をお受けして、2年が経過としております。お話をいただいたときには、私の性格にも能力にも、およそ相応しくないと、ただただ驚きましたが、これまで育てていただいた学会に少しでも役立つならと、お引き受けした次第です。ここまで、ともかく会員にご迷惑をおかけしないよう、なるべく事務局と役員の足を引っ張らないようにと心がけて参りました。

しかし、それまで何の委員も経験していませんでしたから、すべてがわからないことばかり。そこで、各委員会、役割の申し送り事項を文書にさせていただくことからスタートしました。また、単年度赤字を解消すべく、会議の際の交通費を切り詰めたり、大会司会者の昼食なども廃止しました。大学改革の最中、どの役員も極めて多忙な状態ですが、こうした取り組みに快く協力していただき、新しく加わっていただいた若い参事の方たちともども、学会を支えていこうとする熱意を感じました。

ところが、ようやく事務局長として最初の沖縄大会を終えたところで、事務局員の退職という事態に直面しました。ほとんど引継ぎもないまま、4人のアルバイトスタッフが交代しながら業務を行うことになったのです。日常の些細な事柄の一端、たとえば書類がどこにあるのか、コンピュータ処理をどうしたら良いのか、誰に連絡が必要なのか、次に何を準備すべきか、そうしたすべてのことに指示が必要でした。しかし、指示を出すべき事務局長も何も把握できていない状態ですから、一緒に業務しながら試行錯誤するしかない

覚悟しました。

以来、4人のスタッフの中では、途中で留学や就職が決まったための交代もありましたが、抜群のチームワークで業務をこなしてくださっています。当初、危機的な状況と思われた事務局運営は、このスタッフたちのおかげでなんとか軌道に乗りそうです。

このように、学会は事務局スタッフにしても、役員にしても、人が代わることを前提とした組織です。誰か特定の人だけにしかわからない、誰かが抜けると運営できないという状態にしてはならないのです。そのためには、会員が全員で支えていくという意識をもつ必要があるでしょう。

さて、今年役員改選の年に当たります。会則が変更され、理事定数が少なくなったことから、役員の責任はこれまで以上に重くなります。会員みなさまには、棄権することなく、必ず投票をお願いします。役員として積極的に学会運営に携わっていただける、信頼できる方を選出することは、会員の権利でもあり、義務でもあるでしょう。

また、大会やゼミナール、ワークショップといった催しは概して盛況で、発表も活発になされている一方、論文投稿や総会への参加状況は、必ずしも良いとは言えません。こうした面でも、さらなる参加をお願いしたいと存じます。音楽を学び、共有する仲間として協働していくことが、日本音楽教育学会を活性化し、音楽教育をとりまく困難な状況に立ち向かっていく力となるのではないのでしょうか。



2. 報告・お知らせ

2-1 平成18年度 第4回常任理事会報告

日時：平成19年2月18日(日) 14:00~16:30

会場：日本女子大学新泉山館503坪能研究室

出席：有本(小山)，今川，岩崎，加藤，阪井，佐野，島崎，坪能，降矢，村尾
大沼(参事：記録補助)

欠席：岩井，奥

【報告事項】

1. 会務報告等(有本)

- 平成18年10月29日以降の会務報告がなされた。

平成18年

12月2日(土) 第2回日韓合同ゼミナール実行委員会(日本女子大学)
12月27日(水) 学会誌第36-2号，ニュースレターNo.26，日韓合同ゼミナール
発表募集要領発送

平成19年

2月10日(土) 第2回40周年記念論文集編集委員会(東京藝術大学)
2月15日(木) 日韓合同ゼミナール発表募集締め切り
2月18日(日) 平成18年度第4回常任理事会，第3回日韓合同ゼミナール
実行委員会(日本女子大学)

- 『音楽教育学』第36-2号に掲載した『音楽教育実践ジャーナル』投稿規程に一部誤りがあった。3月発行の『音楽教育実践ジャーナル』，学会ホームページに訂正版を掲載する予定。
- 事務局業務：永岡和香子さんの就職に伴い，1月末より亀山さやかさんが引き継いだ。

2. 各委員会報告

(1) 編集委員会(木村委員長から有本事務局長へ報告)

- 次回委員会は，3月10日に開催予定。『音楽教育実践ジャーナル』Vol.5 no.2(通巻10号)の特集については，3月の委員会で検討する。
- 平成18年3月末をもって4人の委員が交替する予定。また，志村委員から今期限りで委員を辞退したいとの申し出があった。

(2) 国際交流委員会(奥委員から有本事務局長へ報告)

- 英文ホームページは，できるだけ早く完成部分から掲載する方針で作業中。
- 3月発行のニュースレターには，中地委員によるドイツ語圏情報を予定。ISME関連として，平成20年ボローニャ大会の演奏団体申し込みを掲載したい。

(3) 音楽文献目録委員会(山下委員から有本事務局長へ報告)

- 平成18年12月9日，第130回委員会を開催。目録34号の刊行，事務局員の退職，広告・助成金開拓などの報告・審議がなされた。

- ・ 文献リスト募集文書と申請用紙見本を作製し、3月に発送する。申請はメールで受け付け、4月末締切り。

(4) 40周年記念論文集編集委員会（佐野）

- ・ 平成19年2月10日、第2回編集委員会を開催（編集委員長：佐野、副委員長：今川、阪井）。①論文集の名称・体裁、②内容構成、③査読、④レビュー論文、⑤刊行までのスケジュールと募集要項等について協議を行った。
- ・ 公募論文の第一次締切りを平成20年3月末日とし(字数12000字以内)、そのことを3月発行のニュースレターに明示する。
- ・ 論文の募集要項の詳細は、6月発行のニュースレターに掲載する。
- ・ 平成21年の第40回大会において販売が可能なように刊行する予定。

(5) 第9回音楽教育ゼミナール(日韓合同ゼミナール)実行委員会（島崎）

- ・ 平成18年9月19日に第1回準備会、10月27日に第2回準備会、10月29日に第1回実行委員会、12月2日に実行委員会を開催。実行委員の決定、実施案の検討等を行った。
- ・ 平成19年1月28日、日韓文化交流基金助成金(人物交流)交付申請を行った。
- ・ 平成19年2月15日、発表募集を締め切った。現在のところ、①ラウンドテーブル5件、②ワークショップ4件、③演奏2件、④レクチャーコンサート0件、の応募がある。今後の取り組みについては、次回委員会において検討する予定。

・ 日程等

日時：平成20年1月12日(土)・13日(日)

場所：日本女子大学

- ・ なお、従来のゼミナールの方向性を尊重しながらも、次回以降はどの地区でも担当できるゼミナールの方向をめざして、全体的に規模の縮小を図っていく。

3. 会計報告（有本・島崎）

- ・ 第37回千葉大会会計報告が本多大会事務局長より提出された。
- ・ 平成18年度夏期ワークショップの会計報告が島崎企画担当理事よりなされた。

4. 第38回岐阜大会について（有本）

- ・ 平成18年2月16日、坪能会長と有本事務局長が岐阜大学を訪問し、古田善伯教育学部長と面会。朝田大会実行委員長、松永実行委員会事務局長から、準備状況について説明を受け、使用予定教室等を視察した。設備も整っており、順調に準備が進められている。千葉大会からの引継ぎは、CD-ROMの記録によってすべて終了している。

・ 大会日程等

日時：平成19年11月10(土)・11日(日)

主催：日本音楽教育学会・岐阜大学

後援：岐阜県教育委員会（申請予定）・岐阜市教育委員会（申請予定）

内容：自由研究・課題研究・院生フォーラム

シンポジウム「感動（共感）を脳科学する」（仮題）

- ・ プロジェクト研究については、次回理事会（5月）において佐野理事よりアウトラインの報告がある予定。

5. 後援について（有本）

- ・ 以下の2件について、本学会の後援名義を使用したことが報告され、承認された。

①東洋音楽学会公開シンポジウム

「伝統文化の形象と発展——音楽教育の現場から」（申請者：加藤）

テーマ：声から始める日本音楽の指導

日時：平成19年1月13日

②多文化音楽教育シンポジウム 2007 in 東京（申請者：降矢）

日時：平成19年3月25日（日）10：30～15：30

会場：東京学芸大学 芸術館ホール

主催：多文化音楽教育研究会

多文化音楽教育シンポジウム 2007 in 東京実行委員会（実行委員長：加藤）

共催：東京学芸大学

【協議事項】

1. 第38回大会研究発表応募要領について(阪井)

応募要領案が提出され、①口頭発表、②共同企画発表のいずれも、平成19年6月10日（日）に応募を締め切ることが決定した。文案については、再度検討することとなった。

2. 第40回大会開催校について(坪能)

第40回大会開催候補校についての協議が行われ、東京学芸大学に検討をお願いすることとなった。また、第41回以降の開催地を決定するにあたっては、①地区単位によるローテーションを組み、担当となった地区内で開催校を決定する、②ローテーションはこれまでの開催順をふまえたものとする、との案が提出され、基本的な方向性は承認された。ただし、ローテーションの詳細については、大会とゼミナールの関係をどうするかなどの課題もあり、継続審議となった。

3. 会則・委員会規程改定について(有本)

- ・ 平成18年度総会より継続審議となっていた、会則改定案第3条(2)の文言についての検討を行った。結果、「学会誌『音楽教育学』その他」の記述を「学会誌その他」に改める案が提出され、承認。次回総会に提出することとなった。
- ・ 国際交流委員会規程の改正案が提出され、承認。次回総会に提出することとなった。

4. 編集委員・国際交流委員の任期について(有本)

事務局長より草案が提出され、承認。会則改正に伴う移行措置として、編集委員については平成19年度からの3年任期を5名、国際交流委員は3年任期を2名選出することとなった。

5. 平成19年度からの委員会新メンバーについて(坪能)

各委員会委員について、以下の各氏に依頼することとなった。

編集委員：岩井正浩，小川容子，北山敦康，嶋田由美，松永洋介（以上 2008 年 3 月までが任期）小川昌文・水戸博道・権藤敦子(残り 2 名については検討中)

国際交流委員：奥忍・塩原麻里・中地雅之(以上留任)，近藤真子・藤井浩基

選挙管理委員：本多佐保美・中館栄子（以上留任），早川富美子・志民一成・小島千か

6. 40 周年記念論文集について(佐野)

編集委員会より，①学会による 300 部の買い上げ，②論文集の編集・刊行に向けての特別予算（2 年半で計 50 万円）についての案が提出され，承認された。

7. その他

- ・坪能会長より，平成 19 年 5 月 26 日に開催される，韓国音楽教育学会 50 周年記念国際学術セミナーに招待を受けている旨が報告された。
- ・岩崎理事より 40 周年記念誌に掲載する写真収集の協力依頼がなされた。

8. 入退会者承認

- ・平成 18 年 10 月 27 日以降の新規入会申込者 11 名，申し出退会者 7 名が承認された。
- ・平成 19 年 2 月 14 日現在 正会員数 1581 名。

新入会者

3392	北川聖子	東京音楽大学(院生)
3393	岡元眞理子	浅井学園大学
3394	茂木 日南	千葉県立柏市立酒井根東小学校
3395	一ノ瀬智子	武庫川女子大学音楽学部
3396	大澤 愛	横浜国立大学大学(院生)
3397	工藤雅之	弘前大学大学(院生)
3398	榊 眸	三重大学大学(院生)
3399	下垣温子	三重大学大学(院生)
3400	高橋一久	上越教育大学大学(院生)
3401	中 磯子	姫路獨協大学 医療保健学部子ども保健学科
3402	水池 純子	仙台市立長命ヶ丘中学校

申し出退会者

0463	山本 敬	千葉大学 名誉教授
1443	南部 峯希	伝統芸術振興会
1624	小泉 恭子	愛知教育大学
2109	新山 真弓	兵庫教育大学
2234	松本 洋子	
2576	中村 礼子	長野市立信田小学校
3048	大富 智子	光市立光井中学校

9. 次回委員会：平成 19 年 5 月 13 日(日) 14：00～ 立教大学

2-2 選挙管理委員会からのお知らせ

このたび、小島千か、志民一成、中館栄子、早川富美子、本多佐保美が選挙管理委員として会長より委嘱を受けました。委員一同、会員のみなさまのご協力をいただき、使命を全うしたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

今回の選挙では、すでにニュースレター26号でお知らせいたしましたように、千葉大会総会での会則等改正を受けて、実施方法が変わります。新しい会則、細則、選挙管理委員会規定、選挙実施要領の詳細は、『音楽教育学』第36巻第2号をご覧ください。

また、次に示します「選挙の公示」および「実施方法」についても、よくお読みいただきますよう、よろしくお願いいたします。これにより、本学会にとってふさわしい会長・理事が選出されますよう期待いたしますとともに、学会の発展に向けて、会員各位の見識ある投票をお願い申し上げます。

なお、選挙実施に関して必要な会則、細則等は、投票用紙等を郵送する際に、資料としてお届けいたします。選挙についてご不明の点がありましたら、選挙管理委員会（事務局内）までお問い合わせください。E-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

選挙管理委員会では、公正で正確な選挙事務を進めて参りますので、会員各位のご理解とご協力をお願いいたします。

公 示

会員各位

平成 19 年 4 月 1 日
日本音楽教育学会選挙管理委員会
委員長 中館栄子

日本音楽教育学会会長及び理事選挙について

会長及び理事の任期満了に伴い、会長及び理事の選挙を、以下の手続きを踏んで実施します。

選挙については、本会会則第8条、第10条、第11条、第12条及び細則第四章第12条～第14条、第五章第15条～第24条及び本会選挙管理委員会規定、本会会長・理事選挙実施要領に基づいて行います。

なお、選挙についてご不明の点がありましたら、選挙管理委員会（事務局内）までお問い合わせください。

会長選挙の実施方法

1. 選挙資格者は、平成 18 年度の正会員（平成 19 年 2 月 18 日の常任理事会にて承認された方まで）で、平成 19 年 5 月末日現在、平成 18 年度までの会費納入済みの人です。なお、平成 19 年度入会者は、選挙権、被選挙権を有しません。
2. 会長は、連続 10 年以上の会員歴を有し、理事経験のある会員の中から選出します。
3. 投票は郵送によります。被選挙資格者名簿、投票用紙などは、選挙資格者確定の後、6 月中旬に発送します。
4. 投票の締め切りは 6 月 30 日（土）（当日消印有効）です。
5. 開票は、締め切り後すみやかにいき、結果は 8 月下旬発行予定のニューズレター第 28 号に掲載します。承認は 11 月の総会（岐阜大学）にて行います。

理事選挙の実施方法

1. 選挙資格者は、平成 18 年度の正会員（平成 19 年 2 月 18 日の常任理事会にて承認された方まで）で、平成 19 年 5 月末日現在、平成 18 年度までの会費納入済みの人です。なお、平成 19 年度入会者は、選挙権、被選挙権を有しません。
2. 被選挙資格者は、選挙資格を有する者のうち、会則第 11 条を適用される者を除きます。今回の選挙でこれに該当する方は、以下の通りです。
関東地区：有本（小山）真紀，今川恭子，加藤富美子
 阪井 恵，島崎篤子，山本文茂
東海地区：南 曜子
近畿地区：奥 忍
四国地区：田邊 隆
九州地区：木村次宏
3. 理事の定数は、本会細則第 20 条により、地区ごとの正会員数に応じて定められています。
4. 投票では、地区ごとにその地区の理事を選出します。
5. 投票時の記名数は、本会細則第 21 条により、地区ごとに定められています。
6. 投票の締め切りは 6 月 30 日（土）（当日消印有効）です。
7. 開票は、締め切り後すみやかにいき、結果は 8 月下旬発行予定のニューズレター第 28 号に掲載します。承認は 11 月の総会（岐阜大学）にて行います。

2-3 平成 18 年度 第 4 回編集委員会報告

編集委員会委員長 木村次宏

平成 19 年 3 月 10 日に、筑波大学附属小学校において、今年度第 4 回目の委員会が開催され、以下の事項等について検討された。

1. 「音楽教育学」への投稿原稿（再査読を含む）の査読結果等について
 - ・4 件が検討され、そのうち 1 件を条件付きで掲載可とした。
2. 「音楽教育学」への新たな投稿原稿の査読者等の決定等について
 - ・2 件の投稿原稿について、査読手続きに入ることを確認した。
3. 編集委員会関係の規程の修正について
 - ・平成 18 年 10 月 28 日に一部改正された、「編集委員会規定」，「『音楽教育学』投稿規程」，「『音楽教育実践ジャーナル』投稿規程」に関して、「音楽教育学（36-2）」巻末に掲載された内容に記載漏れ等が見つかったので、早急に修正をおこなった（次号以降の各誌に修正版を掲載）。
4. 「音楽教育実践ジャーナル」の編集について
 - ・下記の各号について、それぞれ検討をおこなった。
通巻 8 号の進捗状況－最終的な入稿状況等について確認した。
通巻 9 号の進捗状況－依頼原稿の集約状況等について確認した。
通巻 10 号の特集内容－現在検討中。決定次第、学会ホームページやニュースレター等で公表することとした。
5. 「音楽教育学」37-1 号（6 月発行予定）の編集について
 - ・早急に作業内容を確認することとした。
6. その他
 - ・平成 19 年度第 1 回編集委員会を 5 月 13 日(日)に開催することとした。

<お知らせ>

* 投稿規程の改正内容の詳細については、今後発行される学会誌、学会ホームページ等で各自ご確認下さい。

* 編集委員会からのお知らせを学会ホームページに掲載させていただいています。定期的にチェックをお願いいたします。

『音楽教育実践ジャーナル』 Vol.5 no.1 (通巻9号)特集 原稿募集と座談会出席者募集

☆原稿募集中☆

これまでもお伝えしておりますように、現在、『音楽教育実践ジャーナル』通巻9号(2007年8月発行)の特集に向け、下記の要領で原稿を募集しています。

音楽文化が消費文化として語られる昨今、子ども達にとって、また私たち教師にとって、「J-POP」はどのような意味をもたらしているのでしょうか。教材として扱う場合、どのような点に留意したらいいのでしょうか。目まぐるしく変わるヒットチャートの曲をどのようにとらえればいいのでしょうか。1990年代後半から、子ども達のポピュラー音楽に対するコピーイング力や、アマチュアバンドの学習法に焦点を当てた興味深い論文が発表されていますが、学校教育現場での指導法、教材のアレンジ、他領域との関連など取り組まなければならない課題は山積しているといえるでしょう。今回の特集では、J-POPを取り巻く諸現象をとりあげることになりました。実践研究や調査報告、授業分析はもちろん、歌謡史の分析や諸外国との比較といった観点からの原稿も歓迎です。「ジェンダー」「ドラマの主題歌」「音楽産業」「カラオケ」といった用語も、キーワードとして挙げられると思います。授業実践に基づくテーマだけでなく、学校以外の音楽事情や若者観を題材とした論文も受け付けたいと思います。皆様の投稿をお待ちしています。

なお、投稿の際には、特集への募集原稿であることを、必ず、朱筆で明記してください。

●特集タイトル：「J-POPが学校音楽に与える影響」

●投稿原稿締切：2007年4月末日必着

(編集の都合上、締切の時期が早くなっていますのでご注意ください。)

●その他：書式、字数等は『音楽教育実践ジャーナル』投稿規程をご参照ください。

採択された原稿については、編集委員会から5月末日までに投稿者に連絡いたします。

☆座談会出席者募集中☆

『音楽教育実践ジャーナル』通巻9号(2007年8月発行)の中で、『「J-POP」について熱く語ろう!』という座談会を予定しております。座談会では、「J-POP」にどっぷり浸っている若者層からの応援メッセージはもちろん、「昔と比べて今の曲は(歌い手は)・・・」という辛口批判、「子ども達が歌いたがる曲をアレンジする

のが・・・」という体験談も含め、わいわい議論したいと思います。参加費用は無料です。交通費等は各自ご用意ください。

参加ご希望の方は、水戸博道氏（宮城教育大学）あて、お申し込みください。4月末日が締め切りです。その際、氏名、所属、議論したい内容（200字程度）、座談会希望日時をお知らせください。お申し込みいただいた方のご希望を調整して、座談会の日時、場所等、改めてご連絡いたします。

●申込先：水戸博道（宮城教育大学）

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149 宮城教育大学 教育学部

Tel： 022-214-3445

Fax： 022-214-3445

E-mail： mito100@staff.miyakyo-u.ac.jp

*通巻10号(2008年3月発行予定)の特集内容も現在検討中です。決定次第、学会ホームページやニュースレター等でお知らせしますので、確認をお願いします。

2-4 40周年記念論文集編集委員会からのお知らせ

40周年記念論文集編集委員会委員長 佐野 靖

第40回大会（2009年度）刊行に向けて、第2回編集会議（2月10日開催）では、論文集の名称・体裁、内容構成、査読の方法、刊行までのスケジュール等について協議を行いました。そこで、「乳幼児」「知覚・認知」「学校教育」「社会教育・生涯教育」「歴史」「障害児・療法」の各分野で公募する論文の第一次締切りを平成20年3月末日とすることが決まりました。字数は12000字以内とさせていただきます。

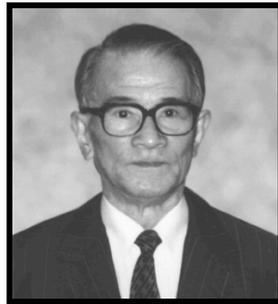
なお、詳細な募集要項は、次回6月発行のニュースレターに掲載の予定です。

編集委員会では、できるだけ多くの論文が集まり充実した論文集となるよう、さらには編集作業が活性化されるよう、さまざまなアイデアを出し合って検討を重ねて参ります。内容等に関しまして、詳細が決まり次第、今後も随時ニュースレターでお知らせいたします。

2-5 お別れのことば

—故・濱野政雄先生をしのぶ—

名古屋芸術大学 山本文茂



故 濱野政雄先生

平成 19 年 1 月 9 日、本学会の名誉会員・濱野政雄先生が 92 歳の天寿を全うされました。先生は戦後日本における音楽教育界のリーダーとして多彩な活動を展開されるとともに、本学会の設立に多大な尽力をされ、昭和 45 年の学会創設以後十余年にわたって理事を勤められるなど、今日の日本音楽教育学会の基盤を作ってくださった先達の重要なお一人として深く謝意を表し、ここに追悼とお別れの言葉を申し述べさせていただきます。

先生は大正 3 年、東京・文京区生まれで、昭和 13 年、東京音楽学校甲種師範科に入学されました。卒業後は福井県鯖江女子師範学校を皮切りに、東京青山師範学校（昭和 17 年～）、東京都教育委員会指導主事（同 24 年～）、文部省教科書調査官（同 31 年～）、東京芸術大学講師（同 40 年～）、同教授（同 45 年～）、同音楽学部長（同 53 年～）を歴任され、昭和 57 年の芸大退官後は武蔵野音楽大学教授として平成 9 年まで勤務されました。

この間、主著『新版音楽教育学概説』をはじめとする多数の著書・論文の執筆、学校放送・教科書編集・日本音楽教育学会・

全日本音楽教育研究会・（財）音楽鑑賞教育振興会などの社会的活動に励まれましたが、平成 9 年 8 月、脳内出血により入院を余儀なくされ、以後 9 年間の病院生活を送られました。

濱野先生は指導主事時代、教科書調査官時代、東京芸大時代、武蔵野音大時代のすべてを通して、人を見抜く鋭いまなざしと、無言の内に学習や研究の意欲をかき立てて下さる不思議な力を持っておられました。濱野先生に接したとたん、今までのんびりしていた人たちがバリバリと仕事をするようになるのです。今私たちがこの偉大な指導者を失い、ふたたび親しく教えを乞うすべもありません。

東京芸大や武蔵野音大の音楽教育研究室における先生のご指導は、学校教育にとどまらず、幼児教育・障害児教育・社会教育・専門教育といった広範な視野のもとに、人間と音楽の関わりを根源にまでさかのぼって徹底的に追究しようとする課題意識に満ち溢れており、多くの後継者を育てられました。

また、濱野先生は教育現場の先生方を温かく研究室に迎え入れ、学生諸君との心の

交流を通して新たな授業実践への意欲を無言の内に現場の先生方から引き出して下さいました。これも先生が築かれた音楽教育研究の誇るべき伝統と言えるでしょう。

濱野政雄先生，私たちは先生の音楽教育

の理念と研究の方法をしっかりと受け継ぎました。後続の若手研究者・実践者も続々と現れています。どうぞご安心下さい。そして，これまでのように，天国から私たちを厳しく，また，温かく見守って下さい。

+++++

3. 大会のご案内・報告（日本音楽教育学会関係） 日本音楽教育学会第38回全国大会へのご案内（1）

平成19年11月10日（土）・11日（日）

会場：岐阜大学

大会実行委員長 朝田 健（岐阜大学）

同 事務局長 松永洋介（岐阜大学）

今年の全国大会は岐阜で開催する予定です。岐阜県は周りを長野，愛知，三重，滋賀，福井，石川，富山の七県に囲まれ，新穂高温泉，飛騨高山，御岳，木曾三川公園（輪中地帯），伊吹山，関ヶ原，白川郷と，自然や歴史，文化の豊かな地です。

会場の岐阜大学は東海道新幹線名古屋駅から東海道本線快速で約18分の岐阜駅で下車し，バスで約30分という場所に位置しています。また中部国際空港からは名鉄岐阜行きの特急で約55分です。

現在7名の東海地区学会員による実行委員会を組織し，学会準備を進めています。会員の皆様の研究発表のための充実した会場環境を整えることはもとより，非会員の皆様にも音楽教育に対する関心を持っていただけるようにプログラムを計画しています。

現在，「感動を脳科学する（仮題）」というテーマのもとに，現在注目を集めつつ

ある脳科学と音楽教育との関係を探るシンポジウムを企画中です。音楽教育の必要性について，脳科学との関連から考え，同時に新しい学習指導要領改訂の方向からそれらがどう関連付くのかを皆様とともに考えていきたいと思えます。

岐阜はまた名古屋とともに喫茶店の充実したところで，朝食のモーニングはコーヒー代だけでトーストと卵，サラダだけでなく，お店によって小倉トースト，オープンサンド，ホットドッグなどを選べたり，おにぎりや茶碗蒸しなどが出てきたりと特色のあるメニューがあります。

詳細につきましては今後HPやニュースレターなどでご案内させていただきます。

どうぞ11月10日，11日（イチイチイチと覚えてください）の両日，皆様お誘い合わせの上お越しくださいますようお待ちしております。

4. 海外トピックス

国際交流委員会 海外の動向 その2

国際交流委員会委員 中地雅之（東京学芸大学）

本稿は、2006年にドイツ・オーストリアで参加した音楽教育シンポジウム3件に関する報告である。

1. オルフ・シュールヴェルク国際シンポジウム オーストリア・ザルツブルグ 2006年7月6—9日

5年毎に開催されてきたオルフ・シュールヴェルク国際シンポジウムであるが、今回は会場および準備の関係で予定から1年遅れ、オルフの生誕111年での実施となった。欧米、アフリカ、アジアから350名以上の参加があり、日本からは井口太、細田淳子、永岡和歌子3氏と筆者の4名が出席した。“Im Dialog 対話の中で”というテーマの下に、約40の講演、演奏、レポート、ワークショップが行われた。

講演では、イギリスの舞踏家 Royston Maldoom のものが注目された。「ベルリンフィルと子どもたち」などを通じて、彼の活動は国際的に知られ、「春の祭典」の映画やDVDは日本にも紹介されている。2006年には、ベルリンフィルと子どもたちのプロジェクトでオルフの「カルミナ・ブラーナ」が取り上げられ、これまで以上の成功を収めたことが映像と共に報告された。併せて、彼のエチオピアでのストリートチルドレンとの「カルミナ・ブラーナ」の上演の経緯や、ベルリンフィルの子どもを対象とした他の音楽教育プログラムも紹介された。子どもたちの社会参加に資する〈音楽と動きの教育〉の数々の実践例は、大変刺激的なものであった。

コンサートでは、世界各国からのボディーパーカッションの競演が印象的であった。オーストリア、アメリカ、フィンランド、トル

コ、スペイン等のパフォーマンスが次々と発表され、さらに出演者全員での演奏も行われた。いずれも身体のみを用いた〈音と動き〉による表現であるが、各国の特徴が見られるのが興味深く、同時にシュールヴェルクの国際的で多様な展開も理解できるものであった。また、バイエルン州トラウンヴァルヘンのカール・オルフ小学校の子どもたちによる音楽劇、ローマの10代の子どもたちによる打楽器アンサンブル、ザルツブルグの音楽学校(Musikschule)のオーストリア民俗音楽・管楽器やギター・サンバの演奏など、子どもたちのパフォーマンスも大変充実していた。

レポート発表では、スイス・ベルンのクレア美術館学芸員による、子どものための総合芸術的アプローチによる教育プログラムも紹介され、〈音楽〉〈動き〉〈ことば〉という枠に留まらない、シュールヴェルクの幅広い可能性が検討されていた。

これらの国際的な広がりには、一方で新たな課題も生じている。アメリカ、オーストラリア、台湾などでは「オルフ」が音楽教育方法論の一つとして重視され、指導資格のグレードなどの認定を行なっている団体もある。しかし、内容が疑問視されるものや、商業的で安易な「オルフ」の名義使用という問題も同時に起こっている。ドイツ語圏では、これまでグレード制などを設けてこなかったが、国際的なスタンダードの設定が各国代表者会議で議論され始めた。しかし、「シュールヴェルクは、メトードではなく理念 Idee である」と述べた、オルフの言と根本的に矛盾するという反対意見もあり、今後さらに国際的に検討していく課題とされた¹⁾。

2. “響きと構造”リリー・フリーデマン生誕100年記念インプロヴィゼーション・フェスティバル ドイツ・ベルリン

2006年6月16—18日

リリー・フリーデマンは、ドイツ語圏の音楽教育における即興表現の一潮流を築いた人物であり、彼女に師事した山田衛子氏による翻訳書が日本でも出版されている(2)。ドイツ語圏を中心に100名以上が参加し、日本人参加者は前述の山田氏(ドイツ在住)と筆者の2名であった。

講演、ラウンドテーブル、展示は、フリーデマンの功績を振り返るものが中心で、学校内外の音楽教育から障害児教育にまでに及ぶ影響が紹介された。また即興演奏の時間が長く設けられ、参加者が小グループを組んで多くの即興演奏の実践を行った。ここでは、事前にテーマ、モチーフ、標題、形式などを決めずに、文字どおりその場で<即興>演奏を行う。これは、ドイツ語圏の即興音楽の一つのスタイルだが、フリーデマンは構成原理に日本の「生け花」のアイデアを応用するなど、ユニークな提案もしている。コンサートでは、Ex Temporeによる即興音楽、生誕75年で存命の女性作曲家ソフィア・グバイドゥーリナ作品などが演奏された。

3. 国際多美的教育学会第24回シンポジウム

オーストリア・ゴールドエック

8月30—9月4日

本学会は、音楽教育以外の芸術・学問領域との統合を目的とし、ヴォルフガング・ロッシャーによって設立されたものである。セミナーハウスとしても用いられている古城が会場となり、ドイツ語圏、ノルウェー、ポーランド、イタリア、南アフリカなどから60名程の参加者を得て行われた。日本からの参加

者は、土屋有里氏と筆者の2名。シンポジウムのテーマは、「21世紀における多美的教育—美的教育のチャンスと限界」で、美的教育がいかに領域を<統合>し得るかを再検討するものであった。多文化、マルチメディア、音楽療法、教師教育などの研究発表が行われ、実践的な領域からの報告の充実が今後の課題とされた。また、「Hikikomori」というテーマで、オーストリア作家 Wolfgang Seierl の現代美術作品群の展覧会が催され、最終日にはイタリアとオーストリアの会員の企画による、即興音楽劇「ピーターパン—忘れられた子どもたち」が上演された。これは、会期中に参加者によって準備されて地域の住民に公開されるものであり、本学会のシンポジウムの特徴的なプログラムの一つである。

筆者は、宮澤賢治の「ざしきぼっこの話」を題材とした即興表現のワークショップを行った。欧州における日本文化に対する興味は年々高まっているようだが、民話1つにも日本人の感覚とは異なる解釈が多数見られた。音楽を含めた日本文化の理解への発信が教育研究の課題であることを再認識した一方で、その可能性の大きさも感じ取ることができた。

上記3つのシンポジウムは、60-70年代にその基礎が築かれたものだが、いずれの会からも何をどのように次世代が継承して発展させるかという課題に面している現状がうかがえた。戦後の経済成長期に音楽教育団体が多数成立した日本も、この種の世代交代という課題に今後直面していくのではないだろうか。

1) 井口太「オルフシンポジウムザルツブルグ 2006 報告」『オルフ 子どものための音楽通信』第28号(日本オルフ音楽教育研究会, 2007年)

2) L. フリーデマン(山田衛子訳)『おとなと子どものための即興音楽ゲーム』(音楽之友社, 2002年)

5. 国内トピックス

5-1 転調する音楽大学

昨年11月18日、朝日新聞夕刊の第1面で「音大転調」というニュース記事が大々的に報じられた。関東地域には載せられていないようであるが、少なくとも東海地区には全域に配信されている。その内容は次のような見出しで始まる。

「ジャズやロックなどポピュラー音楽、音楽ビジネスの実務も学べます。クラシック音楽一辺倒だった音楽大学が姿を大きく変え始めた。背景にあるのは、少子化に伴う大学間競争の激化。大学側は少しでも学生を引きつけようと、授業内容や入試などで従来の枠を超える様々な取り組みを進める一方、将来の可能性に向けて模索を続けている。」

このニュース記事によると、いち早くポピュラー音楽に取り組んだのは洗足学園音楽大学だそうである。もっとも詳しく「音大転調」の様子を具体的に紹介しているのは、名古屋芸術大学の例であり、レコーディングの公開授業や山下洋輔教

授のジャズの授業の様子が述べられている。この他名古屋音楽大学における音楽総合、音楽ビジネス学科の新設、大阪芸術大学における財津和夫（チューリップ）の教授任用、また、フェリス女学院大学では「音大転調」の結果、定員35人に対し、261人が志望した（昨春）と、ということなどが紹介されている。フェリスの場合、卒業生の進路をポピュラー音楽やアニメなどのコンテンツ産業に狙いを定め、学生が作った音楽のインターネット配

信に取り組んでいる、という。これは、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援（現代GP）」に音楽学部で初めて採択された。

こうした状況変化は日本音楽教育学会が直面すべき問題でもある。今年11月開催の岐阜大会では、「音大転調」の背景、現状、改革にともなう近未来の問題を「学会プロジェクト」として調査し、討議することになっている。遅まきながら充実したプロジェクトとなるよう期待したい。



5-2 全日本音楽教育研究会 福井総合大会

大学部会大会「研究発表」の募集要項

—日本音楽教育学会会員の皆様へ—

下記により、標記大会を開催することになりました。皆様の大会参加と「研究発表」へのご応募を心よりお待ちしております。（文責：全日音研大学部会長 山本文茂）

記

部会大会テーマ：「大学で教える音楽の行方—音楽教員養成の可能性を求めて」

期日：平成 19 年 10 月 11 日（木） 9:00 ~17:00

会場：福井県民ホール（福井市内）

内容：

9:00~12:00 研究発表

- ・テーマ 幼児教育，音楽科教育，音楽教員養成，その他
- ・発表時間 質疑応答を含めて 30 分
- ・発表希望者は本年 4 月末日までに下記宛ご一報ください。

〒176-8521 東京都練馬区羽沢 1-13-1 武蔵野音楽大学内
全日音研大学部会事務局（事務局長：秋田賀文教授）

13:00~14:30 シンポジウム

「〈音楽教科教育法〉（8 単位）」の内容を問い直す」

佐野靖教授（東京藝術大学）を中心に、全国調査をもとにした新たな音楽教員養成の内容を提案・討議することになっています。

15:30~17:00 レクチャー・コンサート

「福井から世界への楽器と音楽（仮題）」

良質のマリンバやハープを世界に発信している福井の楽器製作とその素晴らしい音楽の響きをレクチャーと生演奏で楽しみ、味わいたいと思います。

本年度の大学部会大会は諸事情により、事務局企画の大会となりました。昨年度の千葉・聖徳大学大会の成果をさらに深化・発展させ、福井大会の内容を平成 20 年度の部会大会（玉川大学）、平成 21 年度の東京総合大会へと継承したいと考えております。日本音楽教育学会の皆様のご理解とご協力を心からお願い申し上げます。

6. 新刊案内

6-1 『《君が代》考』 東川清一著 (春秋社)

A5判・上製・211ページ
定価(本体1,800円+税)
ISBN 978-4-393-93511-8

定年退職後も次々と新しい著書を出版し続けている東川清一氏がまたまた新著を表した。『《君が代》考』と題する本である。言うまでもなく「君が代」についてはこれまでに数多くの論文、本が出版されている。が、この本の特徴はこれまで数多く論じられてきた「君が代」の歴史的成立過程に関するものではなく、もっぱらこの旋律の音階構造を説明していることである。内容的には特に新しいものではなく、東川氏の持論を「君が代」に当てはめて分かりやすく説明し直した、と言ってよいだろう。すなわち、「君が代」は陽類(ㇿ均)二調レ旋法であり、ㇿ均から1#均への一時的<転均>を含むもの、と説明される。評者は東川氏の旋法理論の熱烈な支持

者の一人である。が、同時にH. ゴチェフスキー氏が唱える「上向、下降を分けた雅楽の律旋法」としての説明のしかたにも共感する。とくに、雅楽唱歌の「保育唱歌」全体からみた場合に説得力がある。そのゴチェフスキー氏は最近「Is Japanese music more consonant than Western?」という興味深い新説を展開している(徳丸吉彦先生古稀記念論文集 pp.227-240)。東川氏の理論の支持者は今なお多くはないが、しかし、正面切って異論を唱えることのできる人も数少ない。本書に対して今後ゴチェフスキー氏がどのような論陣を張ってゆくのか、今後の展開が楽しみである。(評者 村尾忠廣)

6-2 『「音痴」克服の指導に関する実践的研究』 小畑千尋著 (多賀出版)

A5判・上製・212ページ
定価5,145円(本体4,900円+税)
ISBN 978-4-8115-7151-5

「音痴」とは何であろうか? 自分自身を「音痴」だと思っている人はどのくらいいるのだろうか? 「音痴」は克服できるものなのか? このような疑問をお持ちなら、ぜひ本書をお読みいただきたい。

本書は、音痴コンプレックスを持ち、特

に指導が難しいと考えられる自分自身の歌唱の音高・音程の認知ができない「音痴」の成人に対する指導実践事例の分析を通して、「音痴」克服にむけて必要とされる歌唱技能面の指導・心理的援助を明らかにしたものである。その主眼は、指導者による

有効なフィードバックを明らかにし、歌唱者の音高・音程の認知構造、並びに音痴コンプレックス克服のための援助過程のモデルを考案することに置かれている。これらの指導モデルは、「音痴」克服指導において指導者が十分に活用することのできる新たな枠組みになり得ると信じている。

「音痴」克服の事例対象者は、30代女性、50代男性、大学生女子、とさまざまである。詳細な分析から対象者らの変化する過程が明らかに浮かび上がってくる。歌

唱指導に携わる音楽の先生にぜひご一読いただきたい。

(小畑千尋)

付記：本書は、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科に提出し、平成17年3月に博士(教育学)の学位が授与された博士論文「『音痴』克服のための指導に関する実践的研究」を日本学術振興会平成18年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費 課題番号:185296)の助成を受けて公刊された。

事務局からのお知らせ

新選挙管理委員会発足

来年度は、役員選挙が行われます。会長委嘱により、以下の方々が選挙管理委員として選ばれ、常任理事会で承認されました。なお、委嘱は平成19年2月20日付、任期は平成21年3月31日までです。

選挙管理委員

小島千か(山梨大学)、志民一成(静岡大学)、中館栄子(国立音楽大学)
早川富美子(國學院大學栃木短期大学)、本多佐保美(千葉大学)

被選挙資格者名簿の作成にあたって

選挙資格者の所属地区を確定するため、現在お届けの地区ごとに、会員番号、氏名、所属を記した名簿を同封しております。所属が変わられたことをお知らせいただいていない会員、特に大学院生として入会され、修了後も所属変更をしておられない方が多数いらっしゃるようですので、ご確認の上訂正が必要な場合はなるべくメールにて事務局へお知らせください。所属地区(現住所または所属機関の所在地のいずれかを選択可能)の変更については、その旨もお知らせください。なお、5月末時点で会費未納がある会員については、選挙資格、被選挙資格を失いますので、早めの会費納入をお願いいたします。

お寄せいただいた情報、会費納入状況に基づき、6月には被選挙資格者名簿をお届け致します。

編集後記

今年は日本中が異常な暖かさだったようです。東海地方でもついに路面に凍結した氷をみることはありませんでした。このまま本当の春になり、木蓮（マグノリア）の花が咲くのでしょうか。3月初めだというのに私の庭の木蓮はつぼみを大きくつけてもうすぐ咲きそうです。このまま咲いてしまったら怖い気がします。突然、春の雪嵐が襲ってくるような気がするからです。1983年4月、私たちの住んでいたフィラデルフィアがそうでした。薄紫のマグノリアの花びらがピロピロに裂けて、茶褐色になってしまったのです。1 昨年 101 歳で他界した母もその前年、病室から小雪舞うマグノリアをただただじっと見つめておりました。

下記の詩はそういうイメージを歌にしたものです。

マグノリア（木蓮） 薄紫凍て震え、小雪舞しきる春の嵐
もう、これが見納めと君が手折る マグノリア



旋律は愛知教育大学の作曲課題としてつくったものです。マイヤーの暗意—実現モデルの理論を基にして数小節の中に充実した一つのドラマをつくりあげるように工夫しました。実験旋律です。これをソプラノの奥村正子さんに歌っていただいたことがあります。小雪舞う木蓮のシーンが呼び覚まされるような母の歌となりました。（村尾忠廣）

【日本音楽教育学会役員 2005-2007年度】

会長：坪能由紀子 副会長：岩崎洋一・加藤富美子

常任理事：有本（小山）真紀（事務局長），佐野 靖・村尾忠廣（総務）

阪井 恵・島崎篤子・降矢美彌子（企画）今川恭子・奥 忍（会計）

岩井正浩（編集委員）

理事：寺田貴雄（北海道），宮野モモ子・井口 太・熊木眞見子・山本文茂（関東）

篠原秀夫・中山裕一郎（北陸），南 曜子（東海）

安田 寛・嶋田由美・若尾 裕（近畿），小川容子（中国），田邊 隆（四国）

木村次宏（九州）

参事：大石あゆ美・大沼覚子・駒久美子・祝田（夏目）佳子・藤波ゆかり

斐珉卿・間瀬三奈

事務局：中村幸子・岩渕育子・山本華子・亀山さやか

【事務局住所】〒184-0015東京都小金井市貫井北町2-5-22ハイッシーダ1-102

【私 書 箱】〒184-8799東京都小金井郵便局私書箱26

Tel/Fax : 042-381-3562 e-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/index.html>

